

明治8～9年頃から漢詩文の機関誌が次々に発刊されるようになり、その中で、最も勢力があったのが、《新文詩》(8年創刊 森春涛主宰)、《明治詩文》(9年 佐田白茅主宰)などです。

洋学隆盛の中でありながら、漢詩結社の雑誌が盛んになっていった要因ですが、当時、牽引役を担った人々が漢学的教養を背景とした活動を積極的に行ったことが挙げられます。その結果、功なり名遂げた人や社会活動家などは、漢詩文の著作を刊行するのが慣例となっていました。まさに明治の漢詩は空前の発達をとげたのです。

《新文詩》《明治詩文》ともに、編者の豊かな人脈もあって主な掲載者としては、島津久光、勝海舟、副島種臣、重野成斎、川田甕江、安井息軒、三島中洲、大沼枕山、中村敬宇、大槻磐溪、森槐南、依田百川、鷺津毅堂ら、当時の錚々たる文士らが名を連ねたほか、伊藤博文・山県有朋ら政界の重鎮も詩を投稿し、明治期の漢詩壇に大きな影響力を与えました。

《明治詩文》《新文詩》《新文詩別集》ともに紛失が多く収集は困難でしたが、この度、可能な限り揃うこととなりました。このほかに《昭代詩文》(明治21年創刊 綿引泰主宰)も併せて収録いたしました。